

第32回理事会開催 研究助成など112件の助成対象を決定

9月20日に開催された第32回理事会において、研究助成などの助成対象が決定された。今回決定した助成内容は右表のとうりである。

研究助成は、本年4月から5月にかけて一般公募し、その結果864件の申請が寄せられた。これらの中より、各領域別の選考委員会で慎重に審査した結果、97件の助成対象が決まったものである。

国際助成は、主として東南アジアを対象として、生活自然環境、社会福祉、教育・文化に係わる現代社会の要請に対応したプロジェクトに助成をするものであり、公募期間は特に定めず、随時申請に応じており、年3回の理事会で助成対象が決定され、表中の10件は今回の理事会決定分である。

翻訳出版促進助成・東南アジア向け版は、日本の社会・文化・歴史等の文献、および日本人の東南アジア専門家の研究成果のうち、東南アジア諸国にて翻訳出版が望まれるものについて、その促進のために主として翻訳料を助成するものである。表中の2件は今回の理事会で決定したものであり、うち1件はインドネシア向け版であり、もう1件は東南アジア相互版である。相互版は、日本に東南アジアの本の翻訳が少ないのと同様に、東南アジア諸国間でも、相互理解のための翻訳書が非常に少ないので

その翻訳出版が促進されることを期待したプロジェクトである。今回はタイにおける翻訳・出版活動に助成が決定した。

フェローシップ助成は、日本の社会学者が国際的経験を身につけて、日本と海外諸国とのかけ橋となるよう育成するためのフェローシップで、財団法人国際文化会館が運営する「社会科学国際フェローシップ・プログラム」に対して助成しているものである。

フォーラム助成は、今後の財団のプログラムを展開する上で重要な、財団外部の自由な研究活動を助成するものであり、本助成は財団と研究会との合議に基づく計画助成で、一般公募は行わない。表中の2件は今回理事会決定分である。

● 研究助成	97件	2億7,409万円
交通安全、生活・自然環境領域	33件	1億1,289万円
社会福祉領域	29件	8,020万円
教育・文化領域	35件	8,100万円
● 国際助成	10件	2,712万円
● 翻訳出版促進助成	2件	1,696万円
● フェローシップ助成	1件	2,000万円
● フォーラム助成	2件	400万円
● 合計	112件	3億4,217万円

第9回助成金贈呈式

10月14日(金)午後1時半より東京都新宿区の京王プラザホテルにおいて、昭和58年度のトヨタ財団助成金贈呈式が行われた。研究助成を受けられた方々、財団関係の方々など多数のご出席をいただいた。豊田英二 理事長の挨拶、林雄二郎 専務理事の総括報告、各領域選考委員長による選考経過報告の後、理事長より各領域代表者に助成金贈呈書が手渡された。来賓として、トヨタ財団の主務官庁である総理府の内閣総理大臣官房参事官 榎本弘氏よりご挨拶をいただき、午後3時閉会した。





昭和58年度（第9回）研究助成

助成内訳および選後評

本年度の研究助成については、97件、2億7,409万円の助成が決定した。下表は、助成と申請との対照表であるが、件数で全体の採択率をみると11.2%と昨年度（12.6%）を上回る厳しい競争となっている。研究種別件数でみる

と、第I種研究（個人奨励研究）の採択率が最も低い。選考委員会では、冒険的で独創的な発想に富む個人研究をできるだけ多く取り上げようとしたが、結果的には厳しいものとなった。また、今年度から広く応募を呼びかけた「海外及び外国人」に対する助成については、特別の扱いをしたわけではないが、採択率が13.8%と全体に較べやや高い結果となっている。

以下、P3～P5に各選考委員長の選後評を掲げる。

昭和58年度 研究助成結果〈申請—助成対照表〉

			全 体	交通・環境	社会福祉	教育・文化	
1. 件 数		助 成	97(11.2%)	33 (9.8%)	29(13.5%)	35(11.2%)	
		申 請	864 (100%)	336 (100%)	215 (100%)	313 (100%)	
2. 金 額		助 成	2億 7,409万円	1億 1,289万円	8,020万円	8,100万円	
		申 請	30億 2,127万円	13億 1,029万円	7億 9,941万円	9億 1,157万円	
3. 継 続 件 数		助 成	16(38.1%)	6(31.6%)	7(43.8%)	3(42.9%)	
		申 請	42 (100%)	19 (100%)	16 (100%)	7 (100%)	
4. 継 続 金 額		助 成	7,755万円	3,305万円	3,650万円	800万円	
		申 請	2億 6,666万円	1億 3,969万円	9,852万円	2,845万円	
5. 1 件 当 り 平 均 金 額		助 成	283万円	342万円	277万円	231万円	
		申 請	350万円	390万円	372万円	291万円	
6 研究種別件数	第 I 種	助 成	22(10.7%)	7(10.1%)	5(12.2%)	10(10.5%)	
		申 請	205 (100%)	69 (100%)	41 (100%)	95 (100%)	
	II	助 成	47(11.0%)	15 (9.1%)	16(14.5%)	16(10.4%)	
		申 請	428 (100%)	164 (100%)	110 (100%)	154 (100%)	
	III	助 成	28(12.1%)	11(10.7%)	8(12.5%)	9(14.1%)	
		申 請	231 (100%)	103 (100%)	64 (100%)	64 (100%)	
7 研究種別金額	第 I 種	助 成	3,120万円	1,000万円	610万円	1,510万円	
		申 請	3億 1,608万円	1億 1,115万円	6,864万円	1億 3,629万円	
	II	助 成	8,476万円	2,776万円	2,820万円	2,880万円	
		申 請	8億 5,468万円	3億 3,523万円	2億 1,078万円	3億 867万円	
	III	助 成	1億 5,813万円	7,513万円	4,590万円	3,710万円	
		申 請	18億 5,051万円	8億 6,391万円	5億 1,999万円	4億 6,661万円	
8 研究方式	個 人 研 究	助 成	27 (9.0%)	9 (8.6%)	5 (9.3%)	13 (9.2%)	
		申 請	300 (100%)	105 (100%)	54 (100%)	141 (100%)	
	共 同 研 究	助 成	70(12.4%)	24(10.4%)	24(14.9%)	22(12.8%)	
		申 請	564 (100%)	231 (100%)	161 (100%)	172 (100%)	
		(国際共同研究)	助 成	18(22.2%)	7(46.7%)	1 (5.9%)	10(20.4%)
			申 請	81 (100%)	15 (100%)	17 (100%)	49 (100%)
9. 代 表 者 平 均 年 齢		助 成	44.5歳	45.6歳	44.8歳	43.1歳	
		申 請	44.2歳	44.5歳	44.3歳	43.7歳	
10. 海 外 及 び 外 国 人 ※		助 成	8(13.6%)	1(20.0%)	0 (0%)	7(13.7%)	
		申 請	59 (100%)	5 (100%)	3 (100%)	51 (100%)	

※ (注) 海外及び外国人とは、海外在住の外国人、日本在住の外国人、海外在住の日本人を含む。



選後評①

「1/10の厳しい採択率」

交通安全、生活・自然環境領域選考委員長

稲田 獻一

今年も夏の盛りの長時間にわたる審査を終えて選考の仕事が一段落した。「交通・環境」領域では336件の申請に対し33件の助成となった。採択率は約10%である。研究種別で見ると第I種（個人奨励）が7件、第II種（予備研究）が15件、第III種（本研究）が11件である。

選考経過と助成の特徴につき簡単に触れておこう。

（選考の経過）

まず事務局では336件のすべてについて1申請につき3名の評価担当委員を定める。委員の数は私を含めて9人であるから、1名の委員が分担する申請は平均約10件となる。各委員はこれらを慎重に検討し、特に民間財団の助成にふさわしいと考えるもの10数件を推薦する。その結果を持ち寄り第一次選考が行われる。委員会ではこれら推薦のあったものを個別に論議し、全員の賛意のあったものは採択候補に、意見は分れたが更に検討を要するものは保留扱いにする。この段階で採択候補になるものはごく僅かである。

各委員はここで保留となったものについて更に詳細に検討し、10点評価で評点し意見をつけて第二次選考に持ち寄る。この間事務局では申請者と打合せたり資料をとり寄せたり、論点となったことについて調査する。委員会では意見の分れることが多い。確実性の高い立派な研究を優先させるか少々難点はあっても未知数の研究を優先させるか迷うところである。専門的な観点だけでなく社会的な緊急性・有意義性についても議論される。その結果、最終的には保留扱いのものから約半数が採択候補となり、第一次選考の採択候補と併せ理事会に推薦することになるのである。この経過は他の2領域においてもほぼ同様である。

（各種別毎の特徴）

第I種研究では7件が対象となっているが、内2件は第II種で、1件は第III種で申請のあったものである。助成対象は主に大学の若手研究者であり、テーマ的には自然科学と社会科学の境界分野のことが多い。助手クラスの申請の中には大変優れたものではあるが個人の発想による研究というよりも研究室の研究の延長上にあるという性格のものも多く、これらをどう評価すべきかが一つ

の論点となった。結論的にはより個性的なものを優先させたつもりである。

第II種研究では15件が対象となっているが、内1件（1-II-168）は「教育・文化」領域に申請がありそちらの委員会で選考したものである。内容の点から、また類似テーマの助成との関係からこの領域に含めたものである。第II種研究では一専門分野の研究や一研究機関の研究よりも学際的・職際的な共同研究が多くなっている。また、大学などの専門の研究者によるもの以外の民間の研究グループも重視するよう考慮した。なお第II種として助成したもののうち3件は第III種研究として申請のあったものである。

第III種研究では11件が対象となった。内6件が国際共同研究であり、特にインドネシアとの共同研究が4件含まれていることが一つの特徴である。いずれも現地の社会的ニーズに応じたもので現地の共同研究者の積極的な参加が予定されている。またブラジルの日系人グループの研究が採りあげられているのも民間財団の一つの特徴と言えようか。なお11件のうち4件が前年度からの継続である。継続申請はこの他10数件あったが残念ながら採択とならなかった。他からの資金援助や何らかの自助努力で今後の展開を計っていただきたいと思う。

なお、今年度の申請の特徴として、災害関連研究が例年に比し多かったようである。これは近年の災害発生の多発と関係があろう。この申請状況を反映して、助成対象にも災害関連のものが3件含まれている。

（科研費との関係）

今回の選考では文部省科研費との関係が色々な形で話題となった。近年、科研費では海外学術調査、奨励研究、試験研究などのトヨタ財団の助成分野と重なる部分が急速に拡充されてきている。従って財団と科研費への併願も増えており、今年の場合「交通・環境」領域の申請者の約半は科研費に応募している。財団の申請テーマと類似のものや、共同研究者に共通する者の多いもので科研費にパスしたような場合は、財団の方はできるだけ遠慮してもらおうにした。また、単に重複助成となるかどうかだけではなく、できるだけ科研費の研究とは性格を異にするようなものを重視するよう考慮したつもりではあるが、科研費との関係は今後一層検討を要する問題であろう。



選後評②

「現実的な課題解決を重視」

社会福祉領域選考委員長

本明 寛

本年度の社会福祉領域に対する申請は、総数215件、総額7億9,941万円に及び、助成予定額(7,500万円)に対し10倍強であった。

申請の全体を通してみられたのは、中高年・老人問題、障害者の社会復帰や発達援助、及び地域医療・保健などに関するものが多かった様に思われる。また、今年度から、より広く公募を行うこととした海外及び外国人からの申請は3件と少々さびしく、今後この方面からの申請を一層期待するものである。

これらの申請について、選考委員の先生方には7月～8月の猛暑の期間、大変熱心な評価・選考を行って頂いた。その結果、29件の助成を決定することが出来た。

採択率 $\frac{1}{3}$ という厳しい結果となり、大部分の方々にはご期待に沿いかねることとなったが、いずれも現代社会の直面する重要な課題解決を目指したものであり、優劣のつけ難いものばかりであった。

昨年度から設定した研究種別については、その主旨が良く理解されている様に思われたが、特に第I種・第II種研究の中には研究計画や申請経費の点でやや具体性に欠くものが散見された。十分に準備され、良く練られた申請を望みたいところである。

以下、研究種別ごとに若干の感想をつけ加えておこう。

〈第I種研究〉

第I種研究については、41件の申請があり、5件の助成が決まった。いずれも独創的でユニークなものばかりであるが、研究者の内訳をみると院生1、助手2、研究員2となり、すべて大学に籍を置く方ばかりとなった。選考委員会としては大学外の方もとり上げるべく努力したが、研究内容・方法に今一步というものが多かった。

〈第II種研究〉

第II種研究では、110件の申請に対して16件が採択された。このうち7件は障害者(児)にかかわる研究であり、いずれも現実の緊急なニーズから生まれてきたものである。これらの多くは大学の先生方が中心となり、共同研究者として施設等の現場の方が入っておられるものであるが、現場の方が中心になり、代表者となられた研究が採択できなかったのは心残りである。障害者問題に限ら

ず現場中心の研究も重視してほしいとの事務局の要望もあったが、結果的には厳しい選考の過程でこの種のは少数しかとりあげられなかった。なお、第II種研究については、次の本格的な研究への明確な展望と目標をはっきりと示していただきたい。

〈第III種研究〉

第III種研究では、64件の申請に対して8件を採択した。このうち6件は継続申請であり、更にうち5件は第II種研究からの展開である。今回採択できなかった第II種からの継続研究についても、今後何らかの形で研究を進めてほしいものである。新規の申請については、予備的研究で充分検討された継続申請に較べ、相対的に高い評価を得られなかったものが多かった。

新規で助成対象となったものに川崎病の免疫学的研究がある。昨年秋に日本心臓財団の呼びかけにより、この難病の原因究明に関する本格的な取り組みが始まったが、今回の助成はこのような動きを更に展開させるべく行われたもので、同財団とのジョイントプログラムとしての性格をもっている。

(新しい課題の発掘を期待)

助成対象全体としては、医学・工学分野の研究が多く社会科学分野からのものが少ない傾向となったことは今後検討すべき課題といえよう。

いずれにしても、民間財団らしい研究助成を目指して選考を行ったわけであるが、助成金額の枠によって、社会的にも学術的にも意義と価値のある研究を採択できなかったことは極めて残念なことである。従来から社会福祉領域の問題とされている課題にこだわることなく、現代社会の発展に伴って生じた、新しい課題の具体的指摘とその解決を目指した研究の現れることも期待している。

第9回助成金贈呈式後の懇親パーティー





選後評③

「既成の観念に捉われない斬新な研究」

教育・文化領域選考委員長

木村尚三郎

〈海外からの反応〉

教育・文化領域の本年度申請件数は313件で、昨年
の269件、一昨年の242件に比べ着実な伸びを示している。

従来より財団の研究助成では申請者の国籍の如何を問
わないということを標榜してきたが、本年度はその方針
をより一層明らかにするため、海外の日本研究関連機関
510ヵ所に対して応募要項を送ってみた。その結果、海
外の外国人からの申請が、三領域を通じて28件あった。
昨年9件に比べ、著しい増加を示している。

海外の外国人の他に日本在住の外国人も含めると、外
国人からの申請は三領域で38件となったが、そのうち33
件は教育・文化領域に集中している。テーマも、外国人
の視点から日本の社会や文化をとらえるというものが多
かった。このような外国人の申請者にも、申請書は日本
語で書いていただいている。これは事務手続上の制約で
止むを得ない面もあるが、何らかの形で日本に関する研
究を行う以上、相当な語学力は不可欠であり、従って日
本語での申請はむしろ必要条件と考えてもよいとの判断
にもよる。

最初の選考委員会では、国際性を強調するために外国
人の申請については特別枠を設け、多少優先的に採択し
たらどうかという点について議論が行われたが、国際化
の日常化という点からむしろ、これらを日本人の申請と
まったく同列に扱うことが適当であろうということにな
った。しかし、この方針に基づき選考を行ったところ、
結果的には外国人への助成率は、日本人への助成率を上
回る結果となった。

以下、各研究種別の概観を述べる。

〈第Ⅰ種研究〉

第Ⅰ種研究では95件の申請に対し10件（うち1件はⅡ
種からの移行）が採択となった。日本及び外国の大学院
生、フリーの研究者、博物館学芸員など他からは助成の
得にくい若手研究者が主な対象となっている。教育分野
があいかわらず少ないが、現代日本の教育のあり方に鋭
く切り込むような若手の研究が切望される。マイコンを
主要な道具とする研究がいくつか採択されているが、こ
こ一年あまりのマイコンの急速な進歩により、かつて大

型コンピュータの領域とされていた高度情報処理がマイ
コンでも可能となってきた。マイコン・ジェネレーショ
ンともいえる若い世代の研究者が、特に文科系の研究で、
このような武器を縦横に駆使するようになるとき、研究
の方法論自体、今後質的に変わっていくことも考えられる。

〈第Ⅱ種研究〉

第Ⅱ種研究では154件の申請に対し16件（うち2件は
第Ⅲ種から移行）が採択となった。他に1件環境領域に
移して助成対象とされたものがある。第Ⅱ種では海外在
住の外国人からの申請が3件採択となっている。第Ⅱ種
研究では、新しい視点、あるいは新しい方法による研究
分野の開拓がひとつのねらいとなっている。その点外国
人の視点からの研究は、第Ⅱ種の主旨に適するものであった。

〈第Ⅲ種研究〉

第Ⅲ種研究では64件の申請に対し9件が採択となった。
継続助成が、前々年度からのもの1件、前年度の第Ⅱ種
から発展したもの1件と、例年に比べ少なかった。これ
はひとつには、昨年度より第Ⅲ種に限り2ヵ年分一括助
成できるようにしたためでもあろうが、昨年度第Ⅱ種で
助成したのも本研究（第Ⅲ種）に向けて準備にゆっく
り時間をかけようと本年度の申請を見送ったものが多か
ったためと思われる。

〈全体的な特徴・テーマなど〉

教育・文化領域の研究はきわめてヴァラエティに富み、
かつ既成の観念に捉われない斬新な視角からの興味深い
ものが多かった。テーマ・内容を大きく分類すると次の
3つに分けられるように思う。

- ①日本と諸外国との文化交流ないしは文化比較に関する
もの——たとえば、外国人の眼から見た日本の空間概念、
先史・原史時代の地形認識、近代工業発達の過程を明ら
かにする研究、戦前の「対支文化事業」や現代アメリカ
の日系詩人の研究など外国の中の日本文化に関する研究、
日本とビルマの交流や日本と韓国の言語表現の比較研究
など。
- ②日本の伝統文化に関するもの——たとえば、下町の職
人とか地名、入墨習俗の研究など。
- ③言語教育等に関するもの——マイコンによる自然言語
処理やフランス語圏の人びとに対する日本語教育用ソフ
トウェアの開発など。



財団スタッフ出張報告

インドネシア

国際部門 プログラム・スタッフ 牧田東一

本年7月1日から31日まで、マレーシア、シンガポール・インドネシアの3ヶ国を訪れ、国際助成の対象者・申請者のインタビュー、「隣人をよく知ろう」プログラムのアドバイザー・グループのインタビューおよび新規プロジェクト発掘調査等を行いました。今回の海外出張ではインドネシアを中心としましたので、ここではインドネシアについて簡単な報告・感想を述べたいと思います。

海外出張にあたり、岩本オフィサーから言われたのは、「とにかく、現地の研究者特に若手の研究者と仲良くなってください」の一点に尽きます。この短い言葉の中に国際助成のエッセンスが詰まっているのだらうと思いつつ出発しました。この点については、この稿の最後に現在の所感を記したいと思います。

アチエ ——スマトラ島の西端に位置し、アチエ特別州となっています。特別がつくのは首都ジャカルタとジョクジャカルタ以外はここだけ。インドネシア史に占める特異な位置が知られます。ここの人々は熱烈なイスラム教徒で、オランダ植民地支配に抗したアチエ戦争で勇武の民と言われます。アチエ博物館の研究スタッフ、地元ジャクワラ大学の研究者と会い、主としてアチエ史研究の状況をインタビューしました。博物館には、オランダによるアチエ研究の資料がほぼそろっており、古文書の調査もかなり行われています。

リアウ ——スマトラ島中部、マラッカ海峡を挟んでマレーシアに面し、マレー人の最も古い王朝が在ったと言われています。海峡を介して、マレー文化圏の中心地の一つでした。ここでは、リアウ大学と、シンガポールと目と鼻の先にあるピンタン島にある昔のラジャ（王）の宮殿を改造した博物館を訪問しました。リアウ大学は比較的新しい大学で、マレー文化研究と教員養成に力を入れたいのことでした。リアウ州は多くの離島を抱えているため、教員養成が緊急の課題のようです。この地域のマレー研究は未着手の部分がかかなりあり、研究の将来性についてはインドネシア内外の研究者が注目している

ようです。

スダ ——ジャワ島西部、バンドンを中心とした地域はスダ語を話す人々が住んでいて、スダ地方と呼ばれています。ジャワ島中部と東部にはその名の通りジャワ語を話すジャワ人の人々が住んでいます。ジャワ人は、約1億5千万人のインドネシア人口の約 $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{3}$ を占めており、研究の面でもジャワ研究が質・量ともに高い水準にあります。境を接するスダ地方の歴史研究も今後の発展が望まれます。

今回は「隣人をよく知ろう」プログラム・インドネシア向け版の件でバンドンのパジャジャラン大学を訪れました。この日本研究・日本語学は、ジャカルタのインドネシア大学と並んで、インドネシア国内では最も水準の高いところです。

南スラウエシ ——スラウエシ島の南スラウエシ州には、ブギス、マカッサル、マンダル、トラジャの4民族が住んでいます。ブギス、マカッサル両民族は、一時この海域の海上貿易をほぼ独占した一大海洋国家の子孫で、大きな目・鼻は海の王者の面影をとどめています。山地一帯は舟型屋根と独自の死者祭礼で有名なトラジャの里です。州都ウジュンパンダンのハサヌディン大学は、最近優れた研究が行われているようです。

財団ではプログラム・ディヴェロップメントということが屢々いわれます。冒頭の岩本オフィサーの言葉も、これに関しているわけですが、咀嚼すれば以下のような事ではないかと考えます。(1)国際助成では、それは、単に助成対象先を探し出す事に留まらず、様々な問題が生じた場合に、適切な解決法を探り、実行する為の、数多くの密度の高い人間関係の網を築くこと、(2)個々の研究・事業が相手社会の文脈の中でどこに位置づけられ、どのような意味を持つかを時々刻々変化する相手社会の中で明らかにするためには、常に開かれた情報網、すなわち、継続的でフラクナ人間関係を保つこと——つまり人間関係が基盤なわけですが。と同時に、そこからプログラムという形を作り出し、それを我々の側の文脈で読みかえる作業が必要だろうと考えます。

インドネシアに関しては、この国の民族と文化の多様性の巾の大きさをどう正の方向に読みかえていくかが、課題となっていくのではないかと考えました。



活動案内①

第17回研究報告会と研究交流会議
草の根と行政の間

—住民によるまちづくりの可能性—

トヨタ財団の助成による、住民の発想を生かしたまちづくりに関する4件の研究事例報告と、日本各地の住民を中心とするまちづくり活動グループ相互の交流会議とを2日にわたって行います。

概要は以下のとおりです。出席ご希望の方は、出席希望日・氏名・職業・年齢を明記の上、11月末日までに、ハガキにて財団までお申し込み下さい。

入場は無料、定員は200名です。

場所：京都市左京区岡崎 京都会館会議場
主催：トヨタ財団 共催：まちづくり交流会議準備会
プログラム：

第1部 昭和58年12月10日（土）13:20-18:00

研究報告1 住民による地域診断書作成の方法

地域診断研究会 吉村元男
河野 泰

研究報告2 住民による地域診断・真間川における事例
真間川流域研究会 高野公男

コメント 京都新聞社編集委員 杉田博明
大阪大学工学部教授 末石富太郎

研究報告3 京都・岩倉における土地利用協定の模索
岩倉まちづくり研究会 奥山文朗

研究報告4 奈良・元興寺における町並協定の模索
奈良地域社会研究会 木原勝彬

コメント 京都市計画局主査 吉田秀雄
法政大学法学部教授 田村 明

第2部 昭和58年12月11日（日）10:00-16:30

各地からの報告 「今、関西では・・・」

関西各都市のまちづくりグループより有志約10名
総合討論 「住民によるまちづくりと専門家の役割」

司会 日本経済新聞社編集委員 塩見 讓

討論者 名古屋大学理学部教授 島津康男

神戸市市長室参事 高寄昇三

COM計画研究所代表 高田 昇

MANU都市建築研究所代表 高野公男

ドウタンク・ダイナックス代表 田中栄治

トヨタ財団 第3回研究コンクール

“身近な環境をみつめよう”

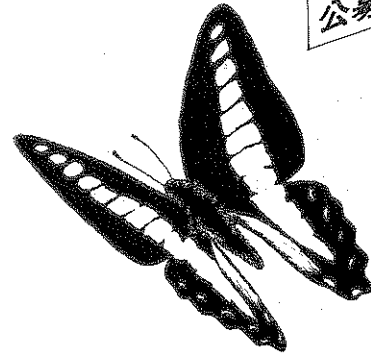
学校の先生、役場の人、お医者さん、博物館の人、保健所の人、主婦の方々、小・中・高校生、そしてもちろん大学や研究所のプロの研究者も、みんなで自分たちの身近な環境をじっくりみつめ、そしてよりよい環境を考えていこうというのがこのコンクールです。

研究奨励賞10数件に対して2年間の研究活動のための奨励金（金賞500万円、銀賞200万円）を贈呈いたします。さらにこの2年間の研究活動で特に優れた成果をあげたものには研究奨励特別賞として、その後の長期的な活動のための資金（1000万円）を援助します。

全国からユニークな研究企画が寄せられることを期待します。詳しくはトヨタ財団までお問い合わせ下さい。

後 援：NHK

公募期間：昭和58年10月15日～昭和59年1月15日



公募案内



活動案内②

第2回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”
中間研究報告会

研究コンクールの研究奨励賞各チームは昨年10月以来2カ年にわたる研究活動を続けていますが、その中間報告会を以下のプログラムにて行います。参加ご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。

日時：昭和58年11月27日（日）・28日（月）
場所：東京都港区六本木 国際文化会館講堂

プログラム：

第1日目 13：30～18：00

①十八鳴浜研究会、②子どもの遊びと街研究会三軒茶屋ブロック、③青森県自然保護の会「コウモリ保護研究会」、④長崎再発見研究会、⑤地域情報研究会・兵庫、⑥インフルエンザワクチンの効果に関する研究班(前橋)、の6チームの研究報告

第2日目 10：20～15：00

①環境農学研究会(米沢)、②首里のまちなみを育成する研究会、③地域のすまい＝まちづくりを考える熊谷グループ、④小樽のまちづくりを考える会、⑤北関東非火山性地熱研究グループ、の5チームの研究報告

活動案内③

昭和57年度研究助成 中間研究報告会

昭和57年度の研究助成を受け、第Ⅲ種研究として2カ年にわたる活動を行っているチームについて、以下のプログラムにて中間研究報告会を行います。参加ご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。

日時：昭和58年12月13日（火）・14日（水）
場所：東京都港区六本木 国際文化会館講堂

プログラム：

第1日目 10：00～18：00

教育・文化領域・1件、環境領域8件の研究報告ならびに「研究室と社会を結ぶもの」と題する討論会

第2日目 10：00～17：20

環境領域1件、特定課題1件、社会福祉領域2件、教育・文化領域6件の研究報告

活動案内④

第7回国際部門セミナー

昨年11月の第6回セミナー「現代タイ文学の発展—ビルマ文学、インドネシア文学との比較において」に引き続き、第7回セミナーを開催します。

今回は、マレーシア、フィリピン、シンガポールの現代文学を取りあげ、マレーシアよりマラヤ大学のアブ・バカル・ハミッド教授をお招きします。

日時：昭和58年12月17日（土）13：30～18：40
場所：東京都港区六本木 国際文化会館講堂

プログラムの概要は下記の通りです。(敬称略)
「マレーシアの現代文学」 アブ・バカル・ハミッド、解説：中原道子、「フィリピンの英語文学」宮本靖介、「フィリピンのタガログ語他の文学」伊東高嶺、「シンガポールの英語文学」長岡みゆき、「マラヤの華文文学」田中恭子。以上の講演に続いて、上記講演者に、アイップ・ロシディ、鈴木佑司のディスカッサントを加えてパネルディスカッションを行う予定です。

参加ご希望の方は、財団までお問い合わせ下さい。

助成財団ミニ情報+++++

◎海外子女教育振興財団では、海外在住の日本人子女を対象に文芸作品コンクールを行っています。去る9月22日、その第4回目の入選作品が決定しました。作品集は11月初旬発刊予定です。お問い合わせは〈Tel03-580-2521:海外子女教育振興財団〉まで。

編集後記

▶本年度研究助成では外国人研究者への助成件数が増えました。また、国際部門はもとより国内の研究助成部門へも外国の方々からの打診がこのところ確実に増えてきています。国際化の日常化が進みつつあるという実感です。

トヨタ財団レポート No.24

発行日 昭和58年10月31日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 久須美雅昭

印刷 真友工芸株式会社

このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。